

ルーテル学院大学新校舎

〈意識の継承と変換〉

正会員 ○ 連健夫※
正会員 渡邊研司※※
正会員 アラン・バーデン※※※
正会員 ※ 武田仁※※※※

※ (有)連健夫建築研究室、AA 大学院優等学位、工学修士
※※ 東海大学助教授 博士(工学)、AA 大学院学位、
※※※ ストラクチャード・エンヴァイロメント 博士(工学)
※※※※ 東京理科大学教授 工学博士(※設計指導)

Lutheran College New Hall

〈Inheritance and Transformation of Consciousness〉

○ MURAJI Takeo※
WATANABE Kenji※※
BURDEN Aran※※※
※ TAKEDA Hitoshi※※※※

※ Muraji Takeo Architectural Laboratory, AA Grad.Hons.Dipl.ME
※ Tokai University, Associate Prof.Dr.Eng.AA Grad Dipl
※※ Structured-Environment, Prof.Dr.Eng.
※※※ Tokyo University of Science, Prof.Dr.Eng(※Advisor)

■建築概要：ルーテル学院大学新校舎はキリスト教学科、社会福祉学科に加え、新たに臨床心理学科が設けられることに伴い、教室数を充足させるべく建設された。既存校舎は村野藤吾氏の設計であり、何らかの形で新校舎と関係付けことが求められた。計画においては、「意識の継承と変換」をテーマに2つの試みを行った。①村野藤吾氏設計の既存校舎におけるコンセプトや設計意図を把握し、新校舎に継承させること②ワークショップを通して利用者である学生の意識やイメージを変換しデザインに活かすこと。

【①村野藤吾氏の設計意図の継承】→小冊子「神の民の家」と村野藤吾氏の解釈と設計

既存校舎と村野藤吾氏との関係を調査する中で、ルター派の建築家、ソビック博士が「神の民の家」という小冊子を出版することによってキャンパス設計のアドバイスをを行っていたことが分かった。

※2002 年度日本建築学会関東支部研究報告集ルター派建築家 E.A ソビック博士によるルーテル神学大学建設の為の小冊子（渡邊、連）
この中で以下の点を読み取れた。1、神の臨在が建物全体に感じられるべきである。2、建築は人と神、人と人、意識とのコミュニケーションの場である。3、材料は本物でなければならない。4、芸術作品こそが聖なるものの表現足り得る。5、未完成未完結ダイナミックな運動といった過程が大切である。6、教会の重要なイメージはキリストの体であり十字架はシンボルである。7、現在の時代を表す建築であるべきである。このコンセプトは既存校舎に反映されており、新校舎においても継承することとした。



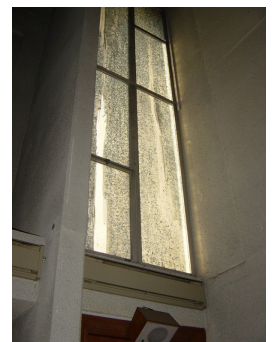
小冊子「神の民の家」



既存校舎の設計者：村野藤吾



既存校舎のチャペル（十字架形から設計）



水、聖霊を表現した
ステンドグラス

【②ワークショップにより、学生のイメージを変換】→新校舎への夢としてのコラージュづくり、施工への参加としてのタイルづくり

利用者である学生の要望、意識、イメージを新校舎の設計に反映すべく、3回のワークショップを行った。参加の意味合いには、学生達の創造性を生かすこと共に、新校舎に対して愛着感を抱いていただくことなどがあげられる。

- 1 回目は、既存校舎の価値について講義をした後に、「たから」（良い点）と「あら」（問題点）を分析するワークショップである。「たから」については、「自然豊かで落ち着く」、「建物の中から外が見える」などであり、「あら」については、「建物がバリアフリーでない」、「廊下が狭く入り組んでおり分かりにくい」などがあげられた。設計に際しては、「たから」を活かすと共に、「あら」を改善することが留意点となった。
- 2 回目のワークショップでは、新校舎への夢を表現すべく、コラージュ（切り貼り絵）づくりを行った。その中から「十字架、光、曲線、木、生活空間、自然」のデザインキーワードが抽出され、それらを新校舎の設計に活かすこととした。
- 3 回目のワークショップでは、施工への参加の意味合いから、陶芸家を招いてタイル作りを行った。白と茶色の土を使い 15 センチ角のタイルをつくった。新校舎のルーフテラスの床に貼った。アンケートで、自分の作ったタイルが新校舎に貼られることの喜びが理解された。



既存校舎の価値についての講演



新校舎への夢をコラージュで表現



タイル作りワークショップ

所在地：東京都三鷹市大沢 3-10-20

主な用途：大学校舎

敷地面積：1956.56m²

建築面積：1076.13m²

延床面積：1820m²

キーワード：大学校舎、継承、ワークショップ、村野藤吾、水冷ビル

Location : 3-10-20 Osawa Mitaka-shi Tokyo

Main Use : School Building in College

Site Area : 1956.56 m²

Building Floor Area : 1076.13 m²

Total Floor Area : 1820 m²

Keywords : School Building, Inheritance, Workshop, Togo Murano, Water-cooling building

■具体的設計への反映

キリスト教のシンボルである十字架と緩やかな曲線を基にデザインした。廊下とトップライトを十字形に配置し、分かりやすい平面計画にすると共に、ペランダや屋根に曲面を用いて柔らかさとダイナミックな雰囲気を持たせた。1階に管理系と生活系諸室をグルーピングし、2階に学習系諸室を配し、中央部に吹抜けを設けることによって一体感を出し、トップライトにより自然採光を取り入れた。既存チャペルのステンドグラスにおける水と聖霊の表現については、トップライトと中央階段大窓に天水を流すことによって表現した。これは打水効果による「水冷システム」として、夏場の冷房負荷を軽減させることとなった。学生からの生活スペースの充実については、1階に大きなラウンジとこれに連続する木製デッキ、2階にはルーフテラスと緑化した屋上を配することで応えた。木の利用については、できるだけ木の内装を用いると共に、耐火建築物要求建物ではあるが、耐火性能検証法を用いて大教室の曲面屋根架構を木構造とし、温かさや親しみ感を付加した。フラットスラブ構造を採用することにより、梁や柱型を無くす共に建物全体を台形にデザインし、既存校舎のデザインの継承を図った。伐採樹木については、思入れの継承という意味合いから、シンボリックに正面開口部のサッシ中央部に配すると共に、屋上やルーフテラス、前庭にベンチとして利用した。



安定感のある台形の立面、曲面のデザイン、木構造の屋根を特徴とする。



木の格子を天井材に用い木質感を与えた。十字形に配したトップライトで明るい。



トップライトと大窓に散水し水冷効果と共に、神（自然）や聖霊の意味合いを持たせた。



既存にも用いられている地窓をラウンジに設けた。



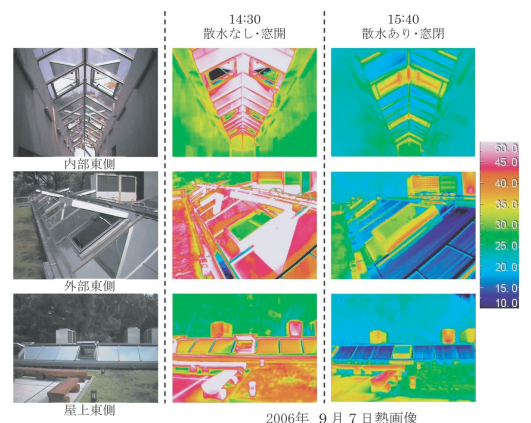
大教室の木柱は伐採樹木を利用。ルーフテラスには学生製作のタイルが貼られた。



1F平面図



2F平面図



散水なしと散水ありでは、ガラス表面温度で 15 度、室内気温では 1 度程度下がる。LESCOM-vapor によるシミュレーションでは年間冷房負荷が約 10.3%削減できると予測された。※2007 年日本建築学会大会梗概：光触媒利用散水システムの実用化に関する研究（大橋、俣田、武田、連）